

Title	青年・成人期の愛着スタイルが親密な対人関係および適応性に及ぼす影響
Author(s)	金政, 祐司
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49144">https://hdl.handle.net/11094/49144</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	かね まさ ゆう じ 金 政 祐 司
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学位記番号	第 2 1 6 1 2 号
学位授与年月日	平成 19 年 10 月 4 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	青年・成人期の愛着スタイルが親密な対人関係および適応性に及ぼす影響
論文審査委員	(主査) 教授 大坊 郁夫 (副査) 教授 日野林俊彦 教授 釘原 直樹 准教授 中谷 素之

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、エソロジー的視点を有する Bowlby (1969/2000, 1973/2000) の愛着理論を背景として展開された Hazan & Shaver (1987) の青年・成人期への愛着理論をベースとし、青年・成人期における愛着スタイルが親密な対人関係および適応性に及ぼす影響について検討を行った。その際、青年・成人期の愛着理論においてその要諦となる親密な他者との関係（主に恋人や母親）における諸側面ならびに適応性の問題に焦点を当て、第三章から第六章の 4 つの章からなる第二部では前者の親密な対人関係の諸側面に対して、また、第七章から第十一章までの 5 つの章からなる第三部では後者の適応性に対して、青年・成人期の愛着スタイルが及ぼす影響の過程を実証的に検討した。

まず、第三章では、青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響について、愛着の概念的二層性に着目し、その一般的なならびに関係的特質双方からの検討を行った。その結果、安定型の愛着スタイルの者は、ポジティブな恋愛イメージや恋愛経験を報告し、回避型の者は、その反対の傾向があった。また、アンビバレント型の者は、恋愛を「独占・束縛」といったイメージで捉えやすかった。さらに、各愛着スタイル群での各変数の影響過程の分析を行った結果は、愛着の自己成就性を示すものであることが示された。

第四章では、愛すること、愛されることへの欲求と青年期の愛着スタイルとの関連について検討を行った。その結果、愛することへの欲求は、愛されることへの欲求を統制することで、愛着次元の関係不安とは負の関連性を示した。反対に、愛されることへの欲求は、愛することへの欲求を統制することで、関係不安とは正の関連性を示した。これらの結果について、愛されることを過度に希求することは精神的健康の悪さに繋がるというこれまでの研究報告から、そのネガティブさについての議論を行った。

次の第五章では、青年期の愛着スタイルが恋愛関係における排他性に及ぼす影響についての検討を行った。その結果、研究 1 では関係不安が高くなるほど排他感が高くなり、親密性回避が高くなるほど排他感を経験しにくくなること、また、排他感の表出性については、親密性回避の高い者は、自身の排他感を表出しにくい傾向があることが示された。研究 2 では、恋愛関係に第三者が介入してきた状況において、関係不安は、未練や悲哀といった感情経験の高さを予測しており、また、その際の対処行動に対しては、親密性回避が高くなるに連れ、建設的な対処行動を取りにくくなることが示された。

第二部最後の第六章では、青年・成人期の愛着スタイルに関して、青年期の子どもと母親間の愛着の世代間伝達について母親と子どものペアのデータを用いて検討を行った。その主な目的は、“関係不安”と“親密性回避”という

愛着二次元において子どもと母親との間に関連が見られるのか、さらに、それらの関連は、子どもと母親双方による母親の養育態度の認知によって媒介されるのかについて検討することであった。その結果、子どもと母親の愛着二次元、「関係不安」と「親密性回避」間にそれぞれ有意な関連が認められた。次に、「1. 母親の愛着スタイル、2. 母親の養育態度認知、3. 子どもによる母親の養育態度認知、4. 子どもの愛着スタイル」というプロセスを辿って愛着の世代間伝達は起こり得るとの仮定のもと、それら変数間について因果モデルを構成し、分析を行った結果、上記のプロセスを経て愛着の世代間伝達が起こり得るというモデルの妥当性が支持された。

第三部の第七章では、青年期の愛着スタイルと精神的健康や親密な関係での自己の認知といった社会的適応との関連について検討を行った。その結果、安定型の愛着スタイルは、精神的健康や関係における自己認知の良さと正の関連を、反対に、不安定型の愛着スタイルは、それらと負の関連を示していた。また、愛着次元の観点からは、「関係不安」は、主に精神的健康に、「親密性の回避」は、関係における社交性や魅力性にネガティブな影響を及ぼすことが示された。

次の第八章は、青年期の愛着スタイルと感情調節ならびに対人ストレスコーピングとの関連についての検討を行った。その結果、安定型愛着スタイル傾向は、感情の表出性や感受性と正の関連を、反対に、アンビバレント型傾向は、それらと負の関連性を示していた。また、安定型傾向は、ネガティブ関係コーピングとは負の関連を、不安定型の愛着傾向は、ネガティブ関係コーピングと正の関連を示していた。これらの結果は、青年期の愛着スタイルと適応性との関連を示すと同時に、幼児期と青年期の愛着スタイルの概念的な対応性を示唆するものであるといえる。

第九章では、自己および他者への信念や期待である青年期の愛着スタイルが、他者の表情の感情認知に及ぼす影響についての検討を行った。その結果、関係不安もしくは親密性回避が高い人は、全体的に表情からポジティブ感情を読み取りにくく、また、関係不安が高く親密性回避の低い人は、(他者志向的な)ネガティブ感情を読み取りやすかった。加えて、親密性回避が高い人は、ポジティブ表情からポジティブ感情を読み取りにくい、関係不安が高く親密性回避の低い人は、ネガティブ表情から(他者志向的な)ネガティブ感情を読み取りやすいといった結果が得られた。これらの結果は、自己および他者への信念や期待によって、同一の表情刺激であってもそこからどのような感情を読み取るかが異なっていることを示している。

第十章では、大学入学者を対象に4月、5月、7月の3度にわたり縦断的データを収集し、回答者の愛着スタイルならびに大学での友人関係への評価とその関係におけるコミュニケーションの仕方が大学入学後の孤独感と精神的健康の変化に及ぼす影響についての検討を行った。その結果、入学時における「親密性回避」の高さは、入学後3ヶ月時の友人との関係に対して全体的にネガティブな影響を示していた。加えて、友人との関係性からは、入学後3ヶ月間の対人関係の適応性の変化である「孤独感の変化」に対してマイナスの影響が見られていた。さらに、「孤独感の変化」からは個人的適応性の変化である「精神的健康の変化」への正の影響が見られていた。これらの結果は愛着次元の「親密性回避」の高さが、友人との関係性にネガティブな影響を及ぼし、それを通じて大学入学後3ヶ月間の孤独感ならびに精神的健康を悪化させる可能性を示唆するものであった。

第三部の最終章である第十一章では、青年期の愛着スタイルと友人関係における自己認知と他者からの認知(親密な友人から回答者への印象)との関連、さらに、青年期の愛着スタイルが関係への評価の相違に及ぼす影響について、回答者本人とその友人のペアデータを用いた検討を行った。その結果、親密性回避は、友人関係における自己認知ならびに友人からの他者認知と全体的に負の関連を示しており、加えて、親密性回避が高くなるほど、回答者の関係への評価は高まる方向に、友人の関係への評価が低下する方向にシフトすることが示唆された。これらは、愛着次元の「親密性回避」が対人関係における適応性の低さに繋がるものであることを示す結果であった。

これまでの研究結果を概括すると、青年期の愛着スタイルにおける「関係不安」の愛着次元は、主に特定の関係への固執傾向や個人内適応との関連が強く、また、もう一つの愛着次元である「親密性回避」は、親密な異性との関係の質や関係葛藤時における対処の仕方、また、個人内適応と深い関連を有するものであることが示された。それらの結果は、近年青年・成人期の愛着に関する議論の中で展開されている「関係不安」とは、愛着システムの活性化や他者への過度の依存を反映するとともに脅威状況の査定についての個人差を示すものであり、また、「親密性回避」とは、愛着システムの不活性化と自立性への過度の強調を示し、接近と回避についての愛着行動の個人差として捉えられるものであるという見解とも一貫性を見るものである。本研究では、基本的に「関係不安」や「親密性回避」が高

い場合、すなわち、個人が不安定な愛着スタイルを有し、自己や他者への信念や期待がネガティブな場合に、相対的に親密な対人関係や適応性はあまり良くないものとなるという研究結果が得られた。しかしながら、これは必ずしも愛着スタイルが、運命論的、決定論的なものであることを示し得るものではない。確かに本論文でも議論したように、愛着に関する自己や他者への信念や期待は、予言の自己成就傾向の作用によって、強化され、継続していく可能性の高いものではあるが、それは常に変容可能性を含みうるものである。今後は、そのような愛着スタイルの変容過程について、時系列的な視点を考慮した研究、検討が望まれるところである。

## 論文審査の結果の要旨

この論文は、Hazan & Shaver (1987) の青年・成人期への愛着理論をベースとし、青年・成人期における愛着スタイル (Bowlby に由来する) が親密な対人関係および適応性に及ぼす影響について多様な方法を用いて検討したものである。特に、親密な他者との関係 (主に恋人や母親) における諸側面ならびに適応性の問題に焦点を当て、論の展開をしている。

先行研究を綿密に精査した充実した研究展望を行った上で、愛着スタイルが親密な関係に及ぼす影響の追究 (3～6章) と、心理的な適応 (7～11章) について主に質問紙法 (多くの種類を使用) を用いながら、また、親子の回答間や友人データとの対照を密に行うなどの工夫を行い、現時点でのこの領域の研究ソースブック的な位置づけの論文を構成している。

まず、親密な関係については、1) 青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響: 安定型の愛着スタイル者は、ポジティブな恋愛イメージや恋愛経験を得、回避型の者は、その反対の傾向がある。また、アンビバレント型の者は、恋愛を「独占・束縛」するものと捉えやすく、これらの傾向は、当事者の生活において回帰的に作用する傾向を明らかにしている。2) 愛すること、愛されることへの欲求と青年期の愛着スタイルとの関連: 愛することへの欲求は、関係不安とは負の関連を、愛されることへの欲求は、愛することへの欲求を統制することで、関係不安とは正の関連を示し、現代多くに見られる被愛願望は、精神的健康を損なうことを確認している。3) 愛着スタイルが恋愛関係における排他性に及ぼす影響: 関係不安が高くなるほど排他感は高くなり、親密性回避が高くなるほど排他感を体験しにくいこと、恋愛関係に第三者が介入してきた状況において、関係不安は、未練や悲哀といった感情経験の高さを予測し、親密性回避が高くなるほど、建設的な対処行動を取りにくいことを明らかにしている。また、4) 大学生とその母親間の愛着の世代間伝達についてデータの照合を行ったペアのデータを用いて検討している。「関係不安」と「親密性回避」という愛着二次元において子どもと母親との間の関連が子どもと母親双方による母親の養育態度の認知によって媒介されることを明らかにしている。また、1. 母親の愛着スタイル→2. 母親の養育態度認知→3. 子どもによる母親の養育態度認知→4. 子どもの愛着スタイル というプロセスを辿って愛着の世代間伝達は起り得るとの因果モデルを仮定し、その分析の結果、このプロセスモデルを確認している。

次に、心理的適応についての研究では、1) 愛着スタイルと精神的健康や親密な関係での自己の認知といった社会的適応との関連について検討: 安定型は精神的健康と正、不安定型は負の関係を示し、また、関係不安は、主に精神的健康に、親密性の回避は、関係における社交性や魅力性にネガティブな影響を及ぼすこと、2) 愛着スタイルと感情調節、対人ストレスコーピングとの関連についての検討: 安定型は、感情の表出性や感受性と正の関連を、ネガティブ関係コーピングとは負の、アンビバレント型傾向は、これとは逆の関連を示していた。これは、青年期の愛着スタイルと適応性との関連を示すと同時に、幼児期と青年期の愛着スタイルの概念的な対応性を示唆するものと言える。3) 愛着スタイルが他者の顔面表情の感情認知に及ぼす影響についての検討: 関係不安もしくは親密性回避が高い人は、全体的に表情からポジティブ感情を読み取りにくい、親密性回避が高い人は、ポジティブ表情からポジティブ感情を読み取り難い。自己および他者への信念や期待によって、同一の表情刺激であってもそこからどのような感情を読み取るかが異なることが示されている。4) 愛着スタイルと精神的健康の変化について大学生を対象として約3カ月の追跡調査: 親密性回避は、友人との関係について全体的に適応的ではなく、精神的健康を低める傾向にあること

が示された。5) 愛着スタイルと友人関係における自己認知と他者からの認知(親密な友人から回答者への印象)との関連の検討(回答者本人とその友人のペアデータを用いた検討): 親密性回避は、友人関係における自己認知ならびに友人からの他者認知と全体的に負の関連を示し、親密性回避が高くなるほど、自分の関係への評価は高まるが、友人の関係への評価が低下することが示された。

関係不安の愛着次元は、主に特定の関係への固執傾向や個人内適応との関連が強く、また、もう一つの愛着次元である親密性回避は、親密な異性との関係の質や関係葛藤時における対処の仕方、また、個人間適応と深い関連を有するものであることが明らかにされた。愛着に関する自己や他者への信念や期待は、対人関係の脈絡において、自己成就的予言的な働きを含みながら、循環的に強化されていく可能性の高いものではあるが、それは常に変容可能性を含みうるものである。これらの論点を、多様な研究を蓄積することによって、綿密に明らかにしたところが、この論文の貢献度の大きさを示している。

本論文の研究成果・考察は説得力のあるものであり、得られた成果および申請者の研究への取り組みから、今後の更なる研究展開が十分に期待されるものと考えられる。

多様な研究の展開、理論的統合の調和のとれた本論文は、博士(人間科学)の学位授与に十分に値するものであると判定された。